

論文の要旨

論文題目 日本語学習者の談話における接続表現の習得研究
氏名 深川 美帆
学位 博士(文学)
授与年月日 平成21年1月31日

本論文は、日本語学習者の発話を、特に節と節、文と文の接続に注目して分析し、習得段階によって、談話の構築の仕方にどのような特徴があるかを明らかにしようとするものである。

何かについて説明したり、自分の考えを述べたりする場合には、自分自身で文を組み立て、談話を展開していかなければならない。こうした能力は、アカデミックな場においても、ビジネスの場においても、一般に見られるものであり、社会生活を営む場において、極めて重要なスキルである。しかし、日本語で談話を構築する際に学習者が抱える問題点や、それに対する効果的な指導のあり方については、まだ明らかになっていないことが多い。学習者がどのような点につまずいているのか、また、学習者の習得レベルによってどのような特徴があるかがわかれば、それを口頭能力の指導や評価に生かすことができる。そこで、本研究では、談話における接続表現に注目し、日本語学習者の談話がどのような言語形式を用いて組み立てられているのか、習得段階によってどのような特徴が見られるかを、学習者の発話資料をもとに分析した。

第2章では、学習者の発話および接続表現に関して、第二言語習得研究、言語能力の評価、および日本語教育の分野において、これまでにどのようなことが明らかになっているかを確認し、本研究の位置づけと目的について述べた。

第3章では、学習者の発話を分析するに当たり、分析対象とする接続表現および発話の定義を、先行研究をもとに整理し、本研究での定義を示した。

第4章では、来日してから6ヶ月間日本語教育を受けた、初級修了レベルの日本語学習者10名の発話資料を縦断的に分析し、個々の学習者の発話が、滞日時間の経過とともにどう変化するかを分析・考察した。その結果、以下のことが明らかになった。

個人差は見られるものの、滞日期間が長くなるにつれて、総語数が増加した。発話量が増えてくると、発話をつないで談話にまとまりをもたせる必要がでてくる。そのために必要なのが接続表現であり、その使い方も時間とともに変化が見られた。第1期(コース修了直後)では、使う接続表現は数も種類も非常に限られていた。使っているのは「でも」や「それから」などの限られた接続詞で、中にはこれらを前後の意味に関係なく過剰使用する学習者も見られた。また、接続助詞類の使用は総じて少なく、比較的多くの学習者に使われているものは、原因・理由を表す接続助詞「から」であった。第2期(コース修了

約 10 ヶ月後)になると、テ形接続(以下、「～て」と)と順接の接続詞「だから」の使用数が増加した。特に「～て」は全員の発話で見られるようになった。また、一部の学習者には接続助詞「けど」や条件表現の使用も多く見られるようになった。第 3 期(コース修了約 20 ヶ月後)は「～て」の使用数が一段と増加するとともに、接続助詞類の使用数と種類も増えた。特に、「から」「けど」「～て」などで文末を言い終わる、接続表現の終助詞的な用法を用いている例も見られるようになった。以上のことから、初級修了以降の日本語学習者の談話における接続表現の出現順序には、1) 第 1 段階: 接続詞+単文、限られた接続助詞類の使用(「から」)、非接続表現(「あと」、並列助詞「と」)の接続詞的使用、2) 第 2 段階: 「～て」の使用、「だから」の使用、接続助詞類(「けど」など)の使用、3) 第 3 段階: 「～て」の一層の使用、その他の接続助詞類の使用、といった傾向があることが認められた。

第 5 章では、日本国内で学ぶ、初級修了レベルの学習者 10 名と上級レベルの学習者 10 名といった、習得レベルの異なる日本語学習者の発話における接続表現について横断的に分析し、習得段階によってどのような言語形式を用いて談話を形成するかを分析・考察した。また、それらと日本語母語話者 5 名の発話を比較し、学習者の発話に見られる特徴を分析・考察した。

その結果、初級修了学習者の発話は、単文と単文を限られた接続詞でつなぐという構造がほとんどであったのに対し、上級学習者の発話では、接続助詞類の使用が多く見られた。また、使用している接続表現も、初級修了学習者の発話では接続詞「でも」や接続助詞「から」など限られた接続表現が使用されていたに過ぎないが、上級学習者の発話においては、「から」だけではなく、「～て」や「けど」などの接続助詞類や、「でも」以外の接続詞類も使用されるなど、使用する接続表現の種類も数も多かった。このように、習得段階の異なる学習者の発話において使用される接続表現には、第 4 章の縦断研究の結果と類似した特徴が見られた。

さらに、日本語母語話者の発話における接続表現の使用と比較すると、特に、上級学習者のほうが、「～て」や「けど」などの接続助詞類を使用する点において、日本語母語話者に近い特徴が見られた。しかしながら、「とき」、「から」など、日本語学習者の発話において、より多く使用されている接続表現もあった。その一方で、接続詞「で(それで)」などは、日本語母語話者の発話ではよく使用されているのに対し、日本語学習者の発話ではほとんど使用されていないこともわかった。また、接続表現を使用せずに発話と発話をつなぐ際に、日本語学習者は、一度発話を切り、その後続の発話の冒頭にソ系の指示詞を用いることで結束性を維持しようとする傾向が、第 4 章の縦断研究においても、この横断研究においても見られた。このような場合、日本語母語話者は、内容節「という」や「の」「こと」といった補足節を用いて表していることがわかった。

第 6 章では、第 4 章と第 5 章の研究での考察をもとに、日本語学習者の発話における接続表現の出現順序および使用傾向について明らかになったことをまとめ、今後の課題につ

いて述べた。